

恐暴竜な転生者

パズドラー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

肺癌によって24歳という若さで命を落とした少年は転生を果たす。その際に特典を一つとお願いをしていた。特典はイビルジョーの能力を自身に付けること。そしてお願いは彼の記憶を……消去すること。

転生した彼は今
……

目

次

1

転生した彼は今……

彼^{イビル・ノラム}がこの世界に転生を果たしてからおよそ二年の月日が流れた。彼は二年前の転生を果たした当初から使い続けてきた穴蔵で考え事をしていた。

というのも彼は二年前突如として森の中に1人で居るところで目を見ましたのだ。勿論転生する前にはちゃんとこの世界の事や、転生する事なども知っていた。だが彼自身が転生前に記憶を消去したお陰で何も分からぬ……というのも少々語弊があるがとにかく記憶のないまま森に放り込まれていたのである。

森で目を見ました当初は何も分からず混乱していた。しかし生前の彼の前向き精神を今回も引きずつてかすぐさまこれからどのようにしていくかを考えた。するとまるで誘っているかのような美味しそうな匂いが彼の鼻を刺激した。彼は匂いに釣られて匂いの元に誘われていくとそこには一つの穴蔵があつた。彼は何の警戒もせずに中に入つていくと中には自分と同じ形をした肉^{人間}が動物の肉を焼いていたのだつた。

肉はいきなり入つてきた彼に驚きはしたもののが凶暴な獣ではない事に安堵した。しかしそうさま異変に気づいた。

彼は匂いに釣られてやつて来たのは一目見て分かつたのだが肉を見て涎を垂らしているのではなく、自身を見て涎を垂らしているのを。そして彼の……いや奴の目が捕食者が獲物を狙うような鋭い眼光でこちらを睨みつけていること。

俺は恐怖に駆られて逃げようとするが時すでに遅し。奴の異常なほど硬く鋭い爪で腹を貫かれ倒れる。声にならない痛みで悶絶しているのを他所に奴は貫いて穴ができた腹を更に大きく広げる。そしてその穴から見えた俺の腸を引きずり出して目の前で喰い出した。俺は痛みで失神しては痛みでまた起きを腸が食われている間に数十回程繰り返した。この時点で精神が壊れていない事が俺にとつては不思議であつたが奴の食事はまだ始まつたばかりである。

次に噛み付かれたのは右腕。人間では有り得ない程の顎の力で俺

の腕は骨や筋肉諸共食いちぎられ、噛み碎かれる。俺は痛みの余り叫ぶのではなく笑っていた。右腕が喰われると次は右脚を喰われる、そして左脚へと奴が向かおうとした瞬間に俺の心は壊れ、奴に命乞いをする。

「助けてくれ。助けてくれ。もう食わないでくれ。死にたくない。死にたくない。死にたくない。死にたくない。死にたくない。」

まるで呪詛の様に懇願する俺を見た奴は一瞬動きを止め、こちらを見る。俺はもしかしたらもう辞めてくれるのかもしれないという希望を持った。もうこれ以上痛い思いをせずに逝けると。しかし奴には願いは届かなかつたらしい。左脚にかぶりつき、左脚ごと胴体から引きちぎつた。

肉^{人間}がピクリとも動かなくなつたので顔を見てみると絶望しながら死んでいったのが誰にでも分かるほど苦痛に歪んだ顔であつた。しきしそんな顔を見た所で彼の食事が終わるはずもなくその後も残つた左腕と胴体、そして最後に頭を噛み碎いてこの世界での初めての食事が終了した。もし前世の彼であればこのような事は起こることもなかつたであろうが、生憎と彼は現在記憶が無いため本能のままに行動したまでなのだ。

その後も1日に2回ほど森の動物や森に来た人間達を喰べながら過ごして現在は冒頭に戻るのだが彼は考えることが苦手だ。すぐ様その考えを捨てて彼は眠りについた。